

# 茂吉の見た左千夫

— 継承と反発と —

貞 光 威

斎藤茂吉の伊藤左千夫との出会いは運命的というか、劇的で、最初の頃、ふたりの関係は例を見ないほどに濃密なものがあつたが、しばらくして対立の関係にはいると、これまた例を見ぬほどに劇烈な様相を示した。

まず、出会いについて、左千夫が世を去って間もない大正二年一月の「アララギ」六卷一〇号に茂吉が発表した回想「先生のこと」、および同誌八年七、一〇月の「思出す事ども」二卷七、一〇号によって見てゆくと次のようである。

茂吉は明治三十九年三月一八日に思い立って東京本所茅場町三丁目無一塵庵に初めて左千夫を訪れる。それよりすこし前に助詞「もが」の使い方について左千夫に質問の手紙を出して、それに対して左千夫から懇切な返事が届く。返信を貰って感激した茂吉は自作の短歌十首を添えて礼状を送る。すると左千夫から三月二

日付ではがきが来る。それは

貴君の作歌の傾向は甚だ面白く候。貴君は一種の天才なる事を自覚し、今の儘にて真直に脇目ふらずにやつて貰ひたく候。決して真似などせぬ様に願ひたい。悪ければ削る。出来たらばどしどし送り給へ。梅の歌も面白い。渡辺幸造君のも面白い。これは四号へ出すべく候。

という、茂吉の歌を賞賛し激励するものであった。伯樂が一日に千里を行く名馬を瞬時に見抜いたとでもいうべき出会いであった。先の礼状に添えた歌は一〇首のうちから五首が採られ、二月一五日発行の「馬酔木」第三卷第二号に掲載された。五首の歌が初めて「馬酔木」に載って感激していたところへ、三月二日付で右のように「一種の天才なる事を自覚」せよと励まされた茂吉は、前の手紙に左千夫が遊びにくるようにすすめていたこともあつて

三月二日に左千夫の家を訪れて入門を果たすのである。

なお、先の三月二日付の左千夫書簡に出てくる「梅の歌」というのは、三巻四号のために二号誌上に募集が告知された課題「梅」に茂吉が応募した作品をさしている。二月一九日付の渡辺幸造宛茂吉書簡を見ると、そこに「梅十首」と題する作品があり、この手紙の終わりに「二月十七日よるか、茂吉」と執筆の日付が示されている。このことから、茂吉は二月一五日に発売された「馬酔木」の三巻二号を購入して、「梅」という四号の課題を知ると早速「梅十首」を作り、一七日の夜には開成中学時代の同窓生で文通によって歌を批評し合っていた友人の渡辺幸造宛にその歌稿を送って批評してもらい、三月二日より前に左千夫のもとへ四号の課題「梅」の応募作品として届けていたことがわかり、その頃の茂吉の短歌に対する熱の入れようが窺われる。

この年の茂吉の「馬酔木」に掲載された短歌には

- 三巻二号「少女年十一」ほか 五首  
三巻三号「海軍少尉なる一友の凱旋をことほぐ  
とて酒飲む」 四首  
三巻四号「祖母と孫」「梅」 一〇首  
三巻五号「雑の歌」 九首  
三巻六号「雑の歌」 一二首

三巻七号「雑」「友女子を生む、友にやる」ほか 一九首  
の五九首があつて、掲載される歌数も号を追ってふえる傾向を見せているのも、茂吉の熱意を反映したものと考えられる。

翌明治四〇年になると茂吉の歌は左千夫の選で「馬酔木」に、

四巻一号「驚き」「よろこび」 六首

四巻二号「伯夷列伝」 一四首

が載る。この年左千夫が「馬酔木」に作品を発表したのはこの二回だけであるが、これは「馬酔木」が左千夫の都合などのためにこの二冊しか刊行されなかったという事情によるもので、茂吉は作品を左千夫のもとへ次々と送っていたらしい。左千夫が選者をつとめる新聞「日本」にこの年は合計七四首、雑誌「趣味」に合計五首が掲載されている。このような精進が認められて、茂吉は五月二五日刊行の「馬酔木」四巻二号の「消息」欄において左千夫により

平福百穂君堀内卓君等の新進作家が斬然頭角を顕し来れるは  
小生愉悦禁じ難き処にて候、其他斎藤茂吉柳沢廣吉君又各独  
特の地歩を占めて注目をひくに至れるも頼もしき限に候。

と賞賛をうける。そして九月一九日には子規庵で開かれた歌会に初めて出席する。

明治四一年一月「馬酔木」は終刊を迎え、翌二月にはそれにか

わって三井甲之の編集で「アカネ」が刊行される。茂吉は創刊号に「赤」と題する一二首を発表しただけで二号からは発表をやめる。茂吉が「アカネ」のために「山火」三〇首を投稿したが、甲之によって没にされるといふことが起こり、茂吉も師の左千夫とともに「アカネ」を脱退したためである。

この年一〇月に千葉県の蕨真のところから、左千夫の編集によつて、「馬酔木」に続くものとして「阿羅々木」が創刊されると茂吉は創刊号には短歌「乱調」二三首を発表し、翌四二年一月発行の一卷二号には「短歌に於ける四三調の結句」という一二ページにわたる歌論と短歌「塩原ゆき」五〇首、それに「漫言」を載せている。「漫言」は三井甲之の歌を取り上げて舌鋒鋭く論難したものである。

この頃、茂吉は頻繁に左千夫の家を訪れていたようで、「思出す事ども」（「アララギ」一二巻七号 大正八年七月）などに、「僕は学校の帰途に本所茅場町にまはり歌稿を目の前で見て貰ふのを例としてゐた。三十首ぐらゐ持つて行つて三首ぐらゐ採つてもらひ、その三首を大切にしまつてまた次の日新作を持ち行つては幾つか採つて貰ひ、それを溜めて雑誌に載せてもらふのである。」

「幾たびも青山の家から本所茅場町の無一塵庵に通つて無理をいひひ取つてもらつたのであつた」等と書いている。これを読む

と、茂吉がこの頃どんなに熱心に左千夫の指導をうけていたかがわかる。茂吉の書いた「漫言」も、茂吉だけでなく、左千夫の甲之に対する怒りを代弁する面のあつたことも推察される。「馬酔木」の末期に根岸短歌会にはいつて左千夫に師事した茂吉は、「アララギ」の初期になると、その熱心さと歌の才能によつて左千夫の信頼を得て、同人たちの中でその重要な位置を占めるに至るのである。「アララギ」一卷二号が刊行された明治四二年一月九日に茂吉は左千夫につれられて、観潮楼歌会に初めて出席している。この歌会は、森鷗外が根岸派と明星派との対立を融和接近させようとして彼の自宅で四〇年三月から開催しはじめたもので、茂吉は根岸派の代表に選ばれたというわけである。これを見ても左千夫の茂吉に対する信頼が察せられよう。四三年の三月になると、茂吉は、それまで古泉千樫が編集を任されていたが、その性格もあつて遅刊をつづけていたので、「アララギ」を建て直すために彼に代わつてその編集人に選ばれる。このことも左千夫の信頼を裏書きしている。この時、茂吉は二九歳であつた。

このように頻繁に師の左千夫のところを訪れて歌の指導を受け精力的に作歌をしたので明治四二、三年ごろには師の信頼を勝ち取つた茂吉であつたが、ちょうどその頃になつて茂吉の左千夫に

対する敵対、反発が始まる。

左千夫と茂吉の間に短歌についての意見の相違が見られるようになったのは、「アララギ」三巻四号（明治四三年五月）に載った、茂吉の作った

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時立ちに  
けり

という歌を契機としてであった。この歌が、同誌四巻一号（明治四四年一月）の「短歌研究」という題の同人たちによる合評欄で取り上げられ、ここで左千夫と赤彦との意見が真向から対立し、左千夫と赤彦、茂吉とが激しく衝突した。すなわち、この歌は独創的な着想があつて面白いとしつつも、一首としてのまとまりがない、上の二句と下三句とのつながりがわからないと非難する左千夫に対し、「我々は今已に物や事柄から進んでその上に味ははれるシミジミした情緒の影を追ひつゝあるのである。その影の色彩が明瞭に描かれれば夫で満足である」と述べて、左千夫の説くような形態の明瞭な描写に努めるのは過去の行き方で、単なる写実では満足せぬ新しい短歌観を赤彦がのべ、ここに左千夫対茂吉、赤彦ら若い世代の同人たちとの激しい衝突が起こつたのであった。対立は同人である岡千里の短歌の評価をめぐるでも起こつた。左千夫は前から千里の歌を多く採って載せるとともに、「技巧の

熟達より進んで、所有<sup>そゆう</sup>実生活の上に於て深く人生の問題に触れた作が多い。実生活の辛苦を味つた人でなければ解することの出来ぬ所まで這入つた」（「消息」「アララギ」五巻一号、明治四五年一月）などと賞賛したが、これを快く思わなかつた茂吉は「童馬漫筆」（「アララギ」四巻六号、明治四五年六月）において、

序に岡千里氏の歌の欠点を書く。濟まないが読んで下さい。

(イ)氏の歌の語法は無茶苦茶のが多い (ロ)表現法が実に下手である。達者の様で居て実に下手である。其意味は率直に表せばよい処を妙にヒネクツて表はして居る為めに殆ど尽く虚偽の感じが先きに立つ (ハ)上の空で大きな事をさも悟つた様に詠んで居る。概念的な伝習の上りの感じの歌が多い。根本から一転化しなければ到底駄目である。余り傲慢の様で具合が悪いが一度読んで見て下さい。

と千里批判を展開し、さらに次の六号（明治四五年七月）の「編輯所便」においても、

小生が前号に於て岡千里君の歌の欠点を指摘したるのは秀歌を思ふの念に外ならず。左千夫先生は柿人千樫及小生の歌に對して飽く迄不満を抱るゝに拘らず千里君の歌だけは『千里はどうも偉い』と口癖の様に云はれるに就き、どうも小生には不思議で堪らず、先生が満足する迄に選びたりといふ千里

君の歌に就き其欠点を感じたる処を云ひたるに過ぎず。

と述べて千里の歌を高く評価する左千夫を攻撃している。

その時のことは大正八年に書いた前掲の「思出す事ども」でも  
当時先生は岡千里君の歌を非常に褒めてゐた。そして『千里  
は偉い』と言つてゐた。僕のところへ選歌の原稿と一しよに  
千里君の歌稿を送つたときも、『一首も削るべからず』とい  
ふことが附いてゐたこともある。或る時、『千里君の歌  
がそんなにどこが久保田や古泉の歌と違ひますか』といふと  
『苦勞を知らない、書生なんか何が分かるものか』といつ  
たことがある。僕は其時顔を赤くして『そんなら一つアララ  
ギで論戦しませう』と云つて、編輯所便か何かで先生に戦を  
挑んでゐる筈である。

と書いており、茂吉が戦いを挑む気持で真剣に左千夫と論争して  
いたことがわかる。

同じような対立が「アララギ」五巻二号（明治四五年二月）に  
載つた赤彦の「野の窓より」の中の四首の歌の評価をめぐつても  
起つてゐる。その歌というのは次の四首である。

あるものは萩刈日和木瓜の果を二人つみつつ相恋にけり  
あるものは髪をなほすと嫁ぎゆきて春の蚕あげぬ別れ来にけり

あるものは草刈小屋の草月夜ねぶりて妻をぬすまれにけり  
あるものは金ある家にとつぎ得て蚕がひやつれぬ病みてかへ  
らず

この作品について作者の赤彦は、次の三号（明治四五年三月）  
の「アララギの歌に就て」で、『あるものは』四首はそれほどよ  
いとは思ひ居らず文章で云へば小品文位のつもりで候昨年作りし  
ものを一寸間に挟みしのみ自信は無之候」と述べているが、つづ  
く四号（明治四五年四月）によると同人の間で意見の対立があつ  
たことがわかる。「茂吉記」の署名のある「短歌小言」には

この四首に対する我々同人の感じには銘々に相違があるが、  
面白いと感じたのは、節、千樫、憲吉、余等であつて、面白  
くないと感じたのは左千夫先生である。

と意見の対立を紹介した後で、「この歌に向かつて『単に題目を  
提供されただけでは満足が出来ぬ』（左千夫氏）と批難があるがこ  
の四首を単に題目の提供に過ぎぬと感じ去つて四首を通じて流れ  
て居る作者の見方作者の心持を全然味はれないといふ評者の感じ  
方に一種の障礙がありはしまいかと不思議がるより致しかたは無  
いのである。」「『同情が足りない』などと難ずるとき（左千夫  
氏）は甚だ見の浅薄なものであると思ふ。」と厳しく非難をして  
いる。そして、この「短歌小言」の終わりの方では、「常に接近

談話して居る同人中にあつて甚だしく意見の相違があるのは、最早議論などすべき以外にあるのではあるまいか。全人格（肉体及精神）の相違から来るのではあるまいか。さうすれば黙するより外途は無いのである。」と短歌結社の師弟としてのみでなく、同人としてのつながりをも認めないような言葉を見せている。

その点では、入門した頃、きわめて熱心に左千夫から歌の指導をうけて、左千夫の選歌欄に毎号歌を発表していた茂吉ではあったが、「アララギ」二巻三号（明治四二年四月）に「雑詠」五首を発表したあと、一年半にわたって「アララギ」に歌を載せなくなる。そして、長期にわたる休詠ののち、三巻七号（明治四三年九月）からは、左千夫の選を経ないで作品を機関誌に発表するようになるのである。

このことについて、茂吉は前掲の「思出す事ども」において、明治四十三年の夏からは、先生の選を経ずに「アララギ」に発表した。併し選を経ずに発表する迄にはいろいろ自分でも考へ、それから先輩の石原純さんの意見をも聞いたのである。と記しており、左千夫を指導者として認めなくなってしまっていることがはっきりとわかる。

先に紹介したように、茂吉からその文学的な感受性を疑われるような厳しい言葉を投げかけられ、誌上に主宰者である左千夫の

選を拒否して作品を発表されるようになって、明治四五年六月の「アララギ」五巻六号に「おことはり」として、

一、選歌を暫く休みます。

二、是から重に歌の批評を致したいと思ひます。

と、短歌の選を中止することを告げている。同じ結社にしながら、指導者として認めずに選を拒否する者が、茂吉ひとりではなく、他にも追隨して出てきては、左千夫も選を続けることができなくなったものと認められる。同じ五巻六号の「どうも気になる」という文章で左千夫は、

僕も始め真面目に論究して見る積りであつたが、茂吉君から「甚だ見の浅薄なるものである」と云はれ「評者の感じ方に一種の障礙がありはしまいか」と不思議がられ、おまけに、「見当違いの批評に過ぎない」とまで痛罵されては、もう対論を試みる勇氣も無くなつた。何者も恐れざる其断定に敬意を表して「さうで御坐居ますか」と引下つて置くことゝしたのである。

と言っている。これを読めば、茂吉の辛辣な言葉に左千夫がどんなに深い心の傷を受けたかがわかる。左千夫が死んでから発見された、思ったことを自由に記した『松籟語録』と題する、晩年のノートに左千夫は、

どうして人間といふものは、こんなに手前勝手になつて終つたのだらう。そんな酷薄冷血な人間どもが、なんらかの都合上相集まつて親密らしい交りをして居るのだ。何といふ寂しい世の中であらう。

と書きつけている。ここには誰とはっきり書いてはいないけれども、この「酷薄冷血な人間ども」の中に茂吉や赤彦など「アララギ」の若い歌人たちが入っていることは間違いないと考えられる。明治四五年四月一日付の寺田憲宛の書簡で左千夫は

「アララギ」も御覧の事と存候。短歌に対する考が三四の人と益々離れゆく有様の前途が気になり参り候。

と言っており、左千夫に叛旗をひるがえした茂吉など若い「アララギ」の歌人たちのことを左千夫が忘れることができなかったことがわかる。翌大正二年一月三〇日付の柳本満之助宛書簡でも左千夫は、

アララギ編輯幹部連は同人の歌よりは夕暮や牧水の歌の方が難有いらしく候それ位なればアララギ同人を捨て、彼等と一致したらよからむと思はれ候。

と書き送っている。このように、茂吉や赤彦などとの対立が解消しないままに、左千夫は大正二年七月三〇日に、孤独のうちに不帰の客となった。

いま述べたように左千夫は七月三〇日午前二時ごろ脳溢血のため昏睡状態に陥り、その日の午後六時に死んだ。茂吉は、この時、長野県上諏訪の布半旅館に滞在中であった。茂吉は、その夜、宿で訃報を受け取った折の衝撃を歌に詠んで、九月一日発行の「アララギ」六巻八号に発表している。言うまでもなく、それが例の有名な連作「悲報来」である。その八首をここに示すと、

ひた走るわが道暗ししんと堪へかねたる我が道くらし  
ほのぼのとのおれ光りてながれたる螢を殺す我が道くらし  
すべなきか螢を殺す手のひらに光つぶれて為んすべはなし  
氷室より氷をいだす幾人はわが走る時ものを云はざりし  
氷きるをとこの口のたばこの火赤かりければ見て走りけり  
死にせれば人は居ぬかなと歎かひて眠り薬をのみて寝んとす  
諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに見むと思へや  
あかあかと朝焼けにけりひんがしの山竝の天朝焼けにけり  
のようで、「アララギ」に出たときは「上諏訪にゐる先生逝去の電報を読む」と簡単な詞書が付けられていただけであったが、大正二年一〇月一五日に東雲堂から出た『赤光』には、

七月三十日信濃上諏訪に滞在し、一湯浴びて寝ようと湯壺に浸つてゐた時、左千夫先生死んだといふ電報を受け取った。予は直ちに高木なる島木赤彦宅へ走る。夜は十二時を過ぎて

ゐた。

という詞書に換えられて、巻頭に据えられた。この連作を読むと、茂吉が左千夫の訃報を手にして大きな衝撃を受けたらしいことがわかる。この衝撃の深さは、左千夫が五〇歳で死ぬなどとは思ってもよらず、しかもそのような急死の知らせを旅先で受けたということもあるであろう。しかし、それと同時に、今まで見てきたように、短歌観をめぐって、茂吉と左千夫とが激しい論争を展開しており、ふたりが対立の状態にあったということも大きく関係していると考えられる。このような事情のため、急逝した師の左千夫をしみじみ追悼するというような趣きからは遠いものとなり、彼自身が「作歌四十年」（『茂吉全集』第十卷所収）において、「恩師の挽歌としては只今でもどうか知らんとおもふ」と言わねばならぬたぐいのものとなっている。

また、その当時のことを茂吉は、「伊藤左千夫先生が事ども」と題する文章（「創作」大正二年九月）で、次のように言う。

予が最終に先生に会つて予の歌を評して頂き予も先生の言論に服せずいろいろと言つた末に先生はいかにも憎々しい、面倒くさいといふ面持をせられて、「斎藤君の歌には芝居気が多い。一体斎藤君は芝居気が多い人間だから」と言はれた。当時予等は先生と議論をしてゐた最中だったからである。先

生の死相に対した時その言をも予は思ひ出した。如何にも静かに死んで居られる先生に対した時さういふ言葉を思ひ出したのであつた。

自然主義に関する言論が早稲田文学を中心として勃興した余程以前に於て、而して美麗なる明星の歌が天下を風靡してゐた当時に於て、人にも知られず微かなる「馬酔木」誌上に於て頑張つてゐた先生の態度を甚だ興味ある事として評せんよりは、現在の予は寧ろ敬礼したい心に住してゐるのである。

長い間鞭打されて眼ざめかかつて来た僕等は未だ腑甲斐ない有様に居る。これからは自分で自分の道を歩まねばならぬ。こよなく寂しい道を歩まねばならぬ（八月十五日夕記）

引用が長くなつたけれども、これを読むと、師を失つてから約半月を経た八月十五日における茂吉に、つい先頃まで対立してきた左千夫に対する穏やかならぬ気持を残しつつも、その一方では永久に師として仕えることができなくなったことを悲しみ、寂しがる気持が生まれてきていることが窺える。

よく知られているとおり、茂吉は論争となると相手を徹底的に攻撃して息の根を止めるまで容赦しないところがあつたから、今まで見てきたように、左千夫との対立においても、茂吉の舌鋒は鋭く、左千夫をして「アララギ」の選歌を止めさせる結果となつ



た。

このような茂吉の興奮も、左千夫が世を去ってから日がたつにつれて、徐々におさまり、静まるにつれて、先師を懐かしんで追慕することが多くなってゆく。茂吉は大正二年一月発行の「アラギ」伊藤左千夫追悼号（六巻一一号）に、「先生のこと」という文章を書いて、そこで、

近ごろ僕等は随分我儘な事をやった。其我儘に就いて長塚節氏に僕が話した事がある。長塚氏は一人ぼつちで居る事の出来る人である。それで僕等の我儘を認めて呉れた。先生が長塚氏に会った時、「長塚君ぼくは一人ぼつちになったよ」と云はれた相である。今つくづくと思ふと、僕等の我儘は先生が居る為めであつたのである。先生といふ彼の力の強い大きなものがあつた為めである。今はもう寂しい。

と記している。これもその当時の茂吉の、左千夫に対する複雑な思いを忠実に語ったものといえよう。

その後も茂吉は折に触れて左千夫について書いてゆく。引用が長くなるが、死んだ左千夫を茂吉がどう言うようになったかを知るために、煩をいとわず、ここに書き出してみることにする。

A 「左千夫のこと其他」（「読売新聞」昭和九年六月一日）

私の師匠は、正岡子規門の伊藤左千夫先生でしたが、本当に偉い人でありました。私はこの年になり、今ごろになつて、いい師匠に就いたことを益々感謝する気持ちになつて居ります。

B 「根岸短歌会と伊藤左千夫・長塚節」

（「国語と国文学」昭和九年八月）

僕は左千夫門の内では後輩の方であつたが、僕の歌には一種の癖があつて、今から見れば、ぞつとする程いやなものです。それでも左千夫先生は或る程度までそれに興味を持たれて、ある時にはそれを助長するやうな褒め方をなされたものです。僕が歌を途中でやめずに先生の亡くなられる頃まで作歌を継続し、先生の歿後も兎に角作歌をやめずに来られたのは、何となしさう云ふ先生の褒め言葉のためであつたかも知れぬと云ふことを今でも時々思出してゐます。

C 「伊藤左千夫先生——叱られて有難く思つた話——」

（「現代」昭和十二年七月）

その頃、先生から取られなかつた歌について、幾らか不平もあり、先生の頭が古いせゐだなどと思つたことは一度や二度ではないのであるが、その後修行を積むに従つて、やはり先

生の方が確かだったとおもふやうになつたものである。(中略) その時はよく分からなかつたし、また幾分不平でもあつたやうにおぼえてゐるけれども、今となつてみればやはり先生の説の方が私よりも一歩進んでゐたことが分かる。併し、先生の言に承服するには、先生と同じくらいの力量に到達しなければ出来ないことであるために、ついこのごろになつて先生の言葉を時々おもひ出してゐるやうなわけである。

D 『伊藤左千夫』(中央公論社 昭和一七年八月) 自跋

先師の晩年は歌に関して余程の高位ところに到り著いて、人麿の歌といへども不満を吐露したほどであつたが、時勢が時勢であつたために、先師のものは一部専門の士のあひだに重んぜられたにとどまり、一般の歌壇は早忙として先師のものを顧る暇もなかつたのである。

然るに先師歿後二十年にしてやうやく、歌壇及び学会の注目するところとなり、先生を対象として論ずる、論文或は著書が世に公にせらるるに至り、就中、山本英吉君の「伊藤左千夫」のごとき良書が出現するまでに至つてゐる。さうして見れば、先生はもはやアララギ同人の限局せられた範囲内に於てのみ私すべき性質のものでは無くなつてゐる。従つて

私のごときも、先生を対象として歌を論ずるうへは、おもふ存分の愚見をあへてすべきであるのに、その実行はつひに私には出来なかつた。本書に於て先生に対する論讚の言の比較的少いのは、これはいまだ自分としては不可能のことだといふ抑制が強く私に迫つてやまなかつたためである。

茂吉の左千夫を賛仰する言葉は、このほかにもまだ見られるが、紙面の都合で省略する。

先に見たような明治四三年ごろから始まって、大正二年七月に左千夫が世を去るまで続いた、茂吉の左千夫攻撃は猛烈を極めた。論争の最中の特殊な状況の中とはいえ、茂吉は指導者である左千夫に対して、「評者の感じ方に一種の障礙がありはしまいか」、「見の浅薄なものである」、「甚だしく意見の相違があるのは、最早議論などすべき以外にあるのではあるまいか」などと、同人としてのつながりをも認めないたぐいの言辞を吐いて、左千夫に「アララギ」の選歌をやめ、結社の主宰者の地位から実質的に降ろるに至らせた。その茂吉が、昭和になつて、AとDのような左千夫賛仰の言葉を折にふれ記すようになってゐる。このことを、我々はどうに受け取つたらよいのか。

中には、昭和期に入つて、「アララギ」が結社として安定する

に及んで、みずからの率いる根岸短歌会の歴史に重みをつけるために、意識してそういう態度をとるようになったと見るむきもあるが、はたして茂吉はどのように政治的な意味合いにおいて言ったものであろうか。最後に、その辺について考察することにした。

まず、確認しておかなければならないことは、この論では、茂吉が左千夫をどのように見たかという観点に立ったために、茂吉が一方的に左千夫を攻撃したかのような受け取られるおそれがないでもないが、論争というものの性質上、けっして茂吉だけが攻撃したのではなくて、左千夫も茂吉を攻撃して、彼の歌を認めようとしなかったという点である。茂吉は「思出す事ども」（「アララギ」第二左千夫号（一二巻一〇号 大正八年一〇月）の中で、「僕の歌が先生から褒められることは無くなって、後にも先にもただ一度褒められたのは、『おくに』といふ連作十数首だけであつた」と述べている。少なくとも、「アララギ」誌上で左千夫が茂吉の「おくに」以外の歌をほめるということをしてはいない。左千夫の方も相当に感情的になって茂吉に対したと考えられるのである。それにもかかわらず、茂吉は激しい攻撃をしばしば加えつつも、明治四四年四月、「アララギ」四巻四号の「編輯所便」

で、「左千夫先生の『冬のくもり』に向つて続々と称賛の意を表して御通知ありし諸君に対し、小生より感謝の意を申し上げ候」と書き、翌月の五号の「編輯所便」では、「万葉新釈は以後佳作の短歌に就き精細に評釈して戴く様左千夫先生に御願ひ申し快諾を得申候」と記すなど、門下としての態度を持っている。『左千夫歌集合評』（三学書房 昭和一九年七月）において茂吉の言うところによれば、連作「ほろびの光」の原稿が左千夫のところから茂吉のもとに送られてきたとき、「感動のあまり、直ちに本所に左千夫先生を訪ひ、この一連の歌につき寧ろ近代的傾向といふべき性質のあらはれに賛嘆した」由であり、左千夫はこれに対して微笑して「近頃は諸君の歌を少しわらく云つてゐるからね」と答えたという。茂吉と左千夫との対立はこのようなものであった。土屋文明は、その著『伊藤左千夫』（白玉書房 昭和三七年七月）で、茂吉の左千夫との対立について触れたあとで、

それは短歌に関するだけのこと、文学に関する限りであつたから、左千夫の没後しばらく長塚節の方に多くの関心を寄せた時代もあつたが、後には左千夫を再評価し、寧ろ旧根岸短歌会同人をして、「大したこともない左千夫を偉くしたのは、斎藤茂吉である」と言はしめるに至つた。

と述べている。この文明のことばのように、歌をめぐる対立

はあったが、茂吉はそれを歌の枠にとどめて、三井甲之が左千夫に對してとったような生活全般にわたり無茶苦茶な悪口雑言を吐くという態度はとらなかつたのである。文明は同じ『伊藤左千夫』において、後年、茂吉が、「左千夫先生の門人でよかつた、鉄幹の門人ででもあつたらどうなつてゐたことだらう」と幾度も洩らしたと述べているが、それもおそらく本心だつたと考えられる。論争の最中においては、興奮のあまり、師に激しい言葉を浴びせることもあつたが、左千夫が死んだあと歳月が流れ、師の晩年に疎まれた不愉快な思い出も薄らいでゆくと、自身が左千夫から受け継いだものを改めて意識するようになったものと考えられる。

その点でもう一つ忘れてならない点は、茂吉の短歌に對する考へが、左千夫が世を去つたあとしばらくして大きく變化したという点である。周知のように、茂吉の第一歌集『赤光』は、左千夫が死んだ年である大正二年の一〇月に東雲堂から刊行された。

この『赤光』が、茂吉の名を有名にしただけでなく、「アララギ」の歌壇における地位をも決定した記念すべき歌集であることは、今日では定説になっていると言つてよい。

ところが茂吉自身は、『赤光』がまだ刊行を見ない時分から、最初は『赤光』はゆつくり時を費して纏める考であつたが、此様な有様であるから一刻も早く葬つて仕舞ひたい。

などと、「『赤光』編輯の時」（『アララギ』六卷七号 大正二年八月）等で不満を洩らしており、この気持は『赤光』が好評をもつて迎えられた後も変わらなかつたようである。そのことは、『赤光』の各版に添えられた跋文によって知ることができる。例えば、三版の跋は、

いかにも不満な歌が多いので、今悲しんでゐる。かつては、いつもりで居つたのであつて、それが今日は駄目である。と記している。

こうした気持から、茂吉はやがて大正一〇年になって、『赤光』の改選版の刊行に踏み切るのであつて、改選『赤光』の跋によると、大正九年一〇月、長崎県西彼杵郡西浦上村六枚板の温泉に転地療養のため滞在したときに、配列の変更、作品の取捨、改作を行つており、それが翌一〇年一月に改選『赤光』として刊行を見るのである。

この大きな『赤光』の改訂については、本林勝夫氏が「文芸研究」昭和二五年一〇月号に載つた「歌集作品成立根拠の問題」

（有精堂日本文学研究資料叢書『近代短歌』に再録）という精細な論において、この改選作業の行われた時期は、作歌の上からは『つゆじも』の末期にあたり、歌論の上では「実相に観入して自然自己一元の生を写す」という写生觀の定立を見た直後で、この

改選版は、沈潜した『つゆじも』の歌境及び『写生観』の定立と不可避の関係において成立している。その結果、初版と改選版との間には主観的発想から客観的なそれへ、感動から観照への推移が示されている旨を述べておられるのは、妥当な見解と思われる。茂吉は改選版の刊行に際して、初版を廃して、以後、『赤光』を論ずる場合には、この改選版によってもらいたい、その跋で述べている。『赤光』については、初版を推すむきが多いにもかかわらず、茂吉が改選版をもって定本とすると宣言し、初版の形での再刊を望まなかったのには、茂吉の短歌観に右のような大きな展開があったからだと考えられる。

このような茂吉の短歌観の大きな展開は、森鷗外が主宰した観潮楼歌会に左千夫に連れられて出席したことなどがきっかけとなって起こった、「明星」の浪漫主義、特に親しく交際するようになった北原白秋などの影響からの脱却と深くかかわっている。紙

面の都合で説明は省略するが、根岸系歌人、正岡子規、伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、土屋文明などの歌人たちの中で、茂吉と、その叙情性において歌風が最も近いのは左千夫だと判断される。明治の末年に強い影響を受けた白秋など「明星」の浪漫主義の影響を脱した茂吉が、この時期に左千夫から受け継いでいるもの大きさを自覚し、先師を重んずる言葉を洩らすようになるのは自然な成り行きであったのである。

左千夫と茂吉、赤彦らとの対立は深刻で、一時は「アララギ」を廃刊一步手前まで追い込んだが、この論争、対立の中から、短歌とは声調の上に自然な形で心の揺れが感じられるような歌でなければならぬとする、左千夫の「叫び」の説や、前にも触れた茂吉の写生説が生まれたことを考えると、短歌史の上で重要な意味をもった論争、対立であったと言えるよう。